空間・社会・地理思想 21 号，145-149 頁，2018 年
Space, Society and Geographical Thought

〈大都市〉のコモン的なる肺

――「社会的協働のコミューン」への補遺としてのネグリへのインタビュー――

アントニオ・ネグリ *、フェデリーコ・トマゼッロ **

（北川眞也 *** 訳）

Federico TOMASELLO
Il polmone comune della metropoli. Intervista ad Antonio Negri in guisa di appendice a La comune della cooperazione sociale
http://www.euronomade.info/?p=2675, Giu 21, 2014

フェデリーコ・トマゼッロ

〈大都市〉についての私たちの対話は、「社会的協働のコミューン」――エウロノーマデ EuroNomade に［2014年］4月に公表されました――によって開始されたわけですが、再び話をはじめましょう。やはり、それについてウーゴ・ロッシによって提出された興味深い「コメント」から得られる刺激を出発点にしたいと思います。

ロッシは、〈大都市〉にかんする君の議論の土台に対し、三つの批判を提示しています。一つ目は、今やそれについてはある種、君はなじんでいるのではないかと想像する批判です。つまり、認知労働と第四次産業に対して置かれた力点は、現代資本主義における生産諸形態の多種多様な特徴を把握しない方向へと、つまりはなおざりにする方向へと進んでしまうという可能性に関わるものです…。

アントニオ・ネグリ

…さて実際のところ、私は、資本主義的〈大都市〉の内部に同居している社会的多様性を否定するつもりはありませんし、採掘的資本の捕獲にさらされている生活様式の多様性も否定するつもりはありません。これらが多種多様であり多数的であるのは明白なことです。しかし、問題は、これらの差異をただ確認することではありません。そうではなく、これらの差異が傾向のただなかにおいていかに展開されているのか、これらの差異のうちで、傾向のなかで有力となる要素を形作っているのはどれなのかを理解することが問題なのです。マルクスのメソッドは、いつも傾向tendenzaの分析によって性格づけられていたのです。

私には、現代の〈大都市〉では、まさにこの第四次産業をそれとして抽出できる――傾向の要素として提出できる――ように思えるのです。第四次産業と比して、他のすべての次元は位置づけられるのではないか。それは、直線的なやり方でなされるわけではありませんが、それらはいつも第四次産業の影響を受けるのです。ときにそれに抵抗もするわけですが、いつもそこに引き入れられるわけです。たとえば、〈大都市〉的蓄積がなされる資本主義空間の内部に、「露天商」も同居しているのは明らかです。しかし、かれらが新しい計算様式、新しいロジスティクス・システムと結合した銀行と市場の新たな諸条件に、いっそう深く結びついていることもまた同じように明らかなのです。

したがって、このテーマについて、私はロッシと同意するでしょう。しかしながら、〈大都市〉の水準における諸々の差異は、必ずしも「混沌としている」わけではなく、より上位のサービス部門へと向かう傾向のなかでこそ解読できるという点を、私は力説しておきたいと思います。

トマゼッロ

つまり、労働形態のなかのこの異質性――それは明らかに存在します――に対峙しても、たとえ異なった程度であろうと、搾取の数多くの輪郭を急襲する資本の価値増殖メカニズムに共通した傾向を考察しようとすることはできるし、またそうせねばならないということですね。

ネグリ

その通りです。私は認識論的観点からみたときに、二つのパースペクティブが区別されなければならないことを強調しています。ひとつは、現象学的、記述的なパースペクティブです。それは、〈大都市〉の場合、主体の複数性、価値が生産され、採掘される様式の複数性を考察、記録するものです。またもうひとつは、傾向的ではありますが、帰納的かつ計画

＊　政治思想家
＊＊　フィレンツェ大学
＊＊＊　三重大学

設計的でもある視点です。この視点は、主体を政治的に再構成するさいの基本的要素としての「知への意志」を突き止めて、肯定するのです。

私は、いつも二つの観点から物事を眺めます。一方は記述的な観点で、他方は再構成的、つまりは計画設計的、実践的、すなわち政治的な観点です。私はある現象に対して、「どのようなものか」という問題のみならず、「どのようにして改変されうるか」という問題もまた自問するわけです。改変するためには、現在の条件がいつも開放、破壊、新たな生産を免れるものではないことを引き受ける必要があるのです。

トマゼッロ

とすると、傾向という主題は、政治的イニシアチブを引き起こす実践的な諸装置を探求することと同一であるということでしょうか？

ネグリ

そうです。それは、フーコーの哲学においては「装置」、カントの語彙では「アポステオリな経験判断」、マルクスの言語では傾向を認識することと結びついた「限定的抽象性」と呼ばれるものです。

トマゼッロ

君は価値が採掘される諸様式、したがって、「採掘主義」という主題について論じてくれました。「社会的協働のコミューン」では、この主題に長い時間をかけましたね。それについて、さらに言葉を加えてもらえないでしょうか？　これは特に、君がこの問題系に中心性を与えるように至ったやり方をはっきりとさせるためです。

ネグリ

採掘主義、社会生活の空間全体に対する価値の資本主義的採掘という主題は、様々なやり方でもたらされたものだと思います。それは、ハーヴェイ、バリバールを通して、ニールソンとメッザードラの資本主義的搾取と諸市場の組織化をめぐる可動的な空間性にかんする言説[訳注1]を通してのことです。これらの膨大な理論的要素は、私にとって重要なものとなってきました。それというのは、私がマルクスについて論じるさいに、協働的要素を、以下のように強調してきたという点においてのことです。協働的要素は、剰余労働と剰余価値の狭義の定義に比しての剰余、また過剰性を生産するものであると。

それから、他方には、金融の諸現象についての研究があります。この研究は――それ自体で完結しており、相対的に自己充足的なものとしてとらえられる金融の理解を超えて――社会のなかで生産されたいっさいを包含する価値への言及を含み込んだものです。

したがって、もし生産的社会の特権的形態が〈大都市〉のそれであるとするなら、価値を捕獲する、また／あるいは剰余価値を蓄積する金融的形態というのは、採掘的でしかありえないわけです。価値の捕獲は、場所、工場という場所よりもむしろ、空間、マルチチュードの空間へと向かうのです。それから、「鉱物の採掘」としての採掘性もまた付け加えることができるでしょう。つまり、新しい原料の採掘としての採掘性のことです――よりうまく言えば、共有材を搾取する採掘と開発ということでしょうか。

トマゼッロ

ロッシによって提示された二つ目の疑問にたどりつきました。それは不動産部門の役割にかかわるものです。進行中の諸過程と傾向の分析において、君は不動産部門の役割を軽視しているというわけです。

ネグリ

不動産は間違いなく極めて重要であり、中心的なものです。それは循環に反するやり方で機能する、あるいは機能しえたものです。資本は直近の成長局面において、金融派生商品とまた別の狂乱的な投機手段を利用したわけですが、とりわけ、不動産投資がそれらを経由するときには、このように言えるでしょう。

とはいえ、注意しなければなりません。イスタンブールのように、ブラジルにおいても、不動産投資が一種の資本主義の黄金熱を生みだしたのは事実です。しかし、そこに劇的な限界が存在するのもまた事実なのです。たとえば、サンパウロあるいはリオでは、都市の移動に、ヘリコプターが世界のどこよりも熱心に利用されています。他方、イスタンブールでは、ボスポラス海峡に架かる橋の数を倍増することを強いられています。これがイスタンブールのヨーロッパ部分を、なおも通行可能とするための唯一の方法だとされているのです。

したがって、不動産部門が「吸い取る」のは事実ですが、いまやそれは〈大都市〉テクスチュアをときに通行不可能、あるいは居住不可能とするくらいに、このような「密集」を引き起こしているのです。それゆえ、私の仮説は、都市の闘争と抗争が、［不動産部門に］〈大都市〉を「大事にする」よう強いなければ、あるいは不動産価値とは無関係の自由で楽しい［大都市の］享受を可能としなければ、都市サービスの

コストが、かなり速いタイミングで、不動産価格を圧迫するだろうというものです。

トマゼッロ

つまるところ、不動産の「コスト」よりも、コモン、サービス、〈大都市〉それ自体の「コスト」こそが核心であるということでしょうか。不動産の「コスト」もまた――ジェントリフィケーションの主題のように――、むしろ〈大都市〉の再生産コストという観点から考察されなければならないということになります…。

ネグリ

まさにその通りです。それゆえに、「〈大都市社会的サンディカリズム〉」は、「〈大都市コスト〉」を増大させることに賭けなければならないのです。なぜなら、「〈大都市コスト〉」は、不動産価値を打破し、破壊するものだから――「〈大都市コスト〉」は、私的なものに抗って表現されるコモンに相当するものだから――です（正確に理解しましょう――ここでは批判的都市計画の役割が必須です）。たとえば、サンパウロで住民が交通機関のコストを下げるために戦うとき、かれらは明らかに〈大都市〉の「資本の側が負うコスト」の増大のために戦っていると言えるわけです。

注意しましょう。こうしたわけで、私たちは、極めてオープンな諸過程について語っているわけですね。というのは、それらの行く末は、いつも闘争によって決定されるからにほかなりません。傾向はいつも、闘争の傾向なのです。それが、資本の関係を拡大し、深化させるのです。つまり、傾向は、即自的に敵対的なものであるわけです。まさにそれゆえに、「諸装置の」秩序に逆らって提出される現象学的な秩序を理解することに、私はいつも困難を覚えてしまうのです。私は、現実主義が現実の反映であるとは考えません。

トマゼッロ

君はちょうどブラジルのことを引きあいに出しました。今回もまた、そこから帰ってきたところですね。「社会的協働のコミューン」で焦点をあてた主題でもありますが、特に最近の出来事にてらして、それについて何か付け加えることはありますか？

ネグリ

ブラジルにおいては、貧者の立場から〈大都市〉のテクスチュアを急襲する闘争の「牽引力」が、私には根底をなしているように思われます。それというのは、貧者たちの闘争が、別のマイノリティの闘争に対して有する牽引する力のことです。貧者たちの闘争こそが、運転手、教師、労働組合の旧来的なすべての部門の闘争を爆発させています。後者もまた、〈大都市〉の内部ではマイノリティとなり、貧者の闘争によって引っ張られているのです。これが［闘争の］中心的な要素であり、質的な要素です。

ここにおいては、労働者階級の諸層を牽引力のある部分としていつもみなす、伝統的な社会主義の仮定はひっくり返されなければなりません。BRICsにおいて、こんなこと［労働者階級の諸層が牽引力をもつこと］は起こってはいません。それが起こるとすれば、往々にして中産階級の要求を表現する闘争になってしまうのです。反対にここでは、貧者の闘争こそが牽引力を有しています。これらは、排除された者たちの闘争ではありません。〈大都市〉の現実のなかに包摂された者たちの闘争なのです。

トマゼッロ

「マイノリティ」にかんするこの言説について、何か付け加えられないでしょうか？

ネグリ

私にはこう思われます。所得（たとえば保証所得［ベーシックインカム］）が、〈大都市〉に生産性をもたらす包括的で開かれた方策と条件を構成すると言われるとき、女性、LGBTQ、サバルタンの権利にそれとして固有に言及されているわけでなく、都市の住民としてかれらがみなされていることは明らかだということです。都市に住まうことは、マイノリティとしてそこにいることと矛盾しない要素であると思います。マイノリティがそれとしてコモンを生産するのではありません。コモンは〈大都市〉のマルチチュード、つまりマイノリティのアサンブラージュによる活動の生産物なのです。

トマゼッロ

私たちのインタビューについて、ロッシによって提示された三つ目の論点――もっとも興味深いものですね――にやってきました。それは「コモン」と「都市への権利」の関係にかかわるものです。それはまた、「再構成ricomposizione」という観点からよりも、統一性へと還元不可能な数々の闘争、数々の差異からなる「アサンブラージュassemblaggio」という観点から考えることを勧める提案でもあります。

ネグリ

非常に興味深いコメントです。けれども、それはマルチチュードの概念が一であることunum、一元的な概念であるという前提に基づいたものです。そ

れとは反対に、マルチチュードはそれとして、諸差異の機械なのです。私はマルチチュードを、都市における出会いと協働の諸契機を通して生産をおこなう特異性の全体と呼んでいます。これこそが、コモンを構成する協働の諸契機にほかなりません。認知資本が有力となった社会においては、〈大都市〉の条件は、それ自身がもっとも高次のコモン的結合、数々の結合を生産できるように、「コモン」が段階的に変化していくことを前提としています。つまり、資本はコモンを餌にするわけですが、社会的協働の強化と増大によって一歩先んじられているのです。

さて、「都市への権利」は、〈大都市〉における協働の密度がもっと未発達な局面に対応するものであるように思えます。実際、私は、メリフィールドやブレナーのような著者たちによって、都市化と諸々の差異のあいだの出会いが、〈大都市〉における真の生産的要素であり、〈大都市〉の「コモン的な肺」を構成していると強調されるさいには、かれらは的を得ていると思っています。

さて、いくつかのあいまいさを、解消できるような考察をここでなすべきだと思います。労働者階級に対する工場のように、〈大都市〉はマルチチュードに対して存在していると述べるとき、私は工場と〈大都市〉（両者ともに、生産がそこから抽出される混沌の総体です）にかんしてはアナロジーを行っているわけですが、マルチチュードにかんしては比喩を行っているわけです。この場合にもしアナロジーが問題となっていたとすれば、マルチチュードがかつての労働者階級のように、潜在的に統一的、かつ有機的なものとみなされていると、実際に疑念をもたれたことでしょう。それとは反対に、マルチチュードとは、存在–抵抗–出会い–協働–主体性の生産という系列にしたがって、数々の特異性からなる「アサンブラージュ」という装置を規定するためにこそ練りあげられたものなのです。あらゆる生産部門に開かれた最低保証賃金について、あるいは保証所得について論じられるときには、そこから、差異と出会い、協働と生産が、〈大都市〉において保証されうるような土台について論じられているわけですね。

トマゼッロ

つまり、思ったのですが、もし陳腐化してしまったら申し訳ないのですが、マルチチュードのように、〈大都市〉もまた、何よりもまず政治的概念として、「都市計画的」観念としてよりも、むしろ政治的概念として理解されるべきだということですね…。

ネグリ

…「都市計画」の技術は、異なったやり方で解読することができるものだと思います――それはしかしながら、いかなる観点からみても、都市への技術的介入が必要不可欠なものであることを認めないものではありません。けれども、「〈大都市〉」について論じられるときには、徹底して生政治的である概念が表現されているという事実が残ります。この概念によっては、空間、時間性、伝統の堅固さ、歴史的諸次元、文化の具現化などの全体が意図されています。

パリは、イル＝ド＝フランスの全体にたえず拡張しつづけていますが、この街の自宅の窓から外を眺めるたびにいつも、私は歴史、数々の闘争、数々の獲得された権利、文化的凝固の諸層を識別するのです。さらにこんにちでは、人口の大部分が〈大都市〉群に居住しており、〈大都市〉の生活様式は、いまや「オルタナティブのないもの」となってきたわけです。それは言葉のもっとも明らかな意味においてのことです。もはや資本主義の外部がないように、〈大都市〉の外部もありません。〈大都市〉は、生産の観点からみたら、結合を生みだす要素でもあり、採掘的蓄積に対して価値のある剰余を引き起こすものでもあるのです。だからこそ〈大都市〉は、中心をなす経済的要素であるわけです。

この観点からすると、私は、［レム・］コールハースによって提出された〈大都市〉構造の読解に、なおもつながれていると言えるでしょう。それは、「残骸」の蓄積によって組みあわされた巨大な生産的装置のことです。それらの残骸が、都市的生産を創出するために必要とされるというわけなのです。けれども、傾向的メソッドにしたがうのなら、残骸と残滓の重要さ、〈大都市〉連結のなかの漂流物と散乱物の重要度を誇張する必要はありません。そうではなく、むしろこれらは、生産的機械として、逆説的に、〈大都市〉の生産のもっとも高次の水準に身を置く機械状諸差異として考えられなければならないのです。

資本主義的〈大都市〉にもはや外部はないという事実は、資本の内部にいつも抵抗があることを否定すること（今やおよそ一世紀にわたってフランクフルト学派の社会学者たちが行っているように）ではありませんし、資本という概念自体（もっとも明らかですが、とりわけ〈大都市〉のそれ）が、階級闘争の概念であることを否定するわけでもありません。

典型的なのは、ブラジル・ファヴェーラのもっとも高次の生産的強度を有する一例です。これは、現在の様々な闘争が与えている衝撃を明白なものとし

た一例です。一方における資本の支配とそれがもたらすヒエラルキー。他方における、それらに抗する集団的存在、特異性からなる様々な生活様式、抵抗、出会い、協働、主体性を生産する諸差異。〈大都市〉闘争のすべては、この双方のあいだの関係をめぐる抗争の内部で考察されなければならないと思います。このいっさいが、コモンという開かれた概念を規定するわけです。コモンは諸差異の機械だとロッシが言うとき、私はこの点においてロッシと同意します。というのは、コモンはマルチチュードによって生産されるものだからです。

2014年6月

訳注

訳注1　メッザードラとニールソンによる分析のほんの一部の内容であるが、以下を参照。サンドロ・メッツァードラ、ブレット・ニールソン（北川眞也訳）「方法としての境界、あるいは労働の多数化」『空間・社会・地理思想』13、2010、51-59頁。詳細な分析は、以下。Sandro Mezzadra and Brett Neilson, *Border as method, or, the multiplication of labor.* Durham, NC and London: Duke University Press, 2013.